

日本人の死生観の底流にあるもの ——虚無に直面して——

2012年2月27日
みんなで「死」を考える会
神戸新聞文化センター
島菌進

I. 死生観への関心

◇「死生観」という語の由来

加藤咄堂(1870-1949)『死生観』井冽堂、1904



第1章 死生観の変遷
第2章 武士道と死生観
第3章 古聖の死生観
第4章 近世の死生観
第5章 死生問題の解決

◇死生問題とは？

- 「生あり死あり、其の間五十年、名けて人生と為す、人は唯だ此蜉蝣の如き生存を以て満足すべきか。上下茫茫数千歳、生ずるもの限りなく死するもの亦限りなし、生ずるもの必ず死して、死するもの必ず生ずるか、生ずるもの必ず死するはこれを目睹すべきも、死するもの必ず生ずるは知り得べきの限りにあらず、此に於て死生の問題は永久の疑團として吾人の前に横はれり、吾人はこれを単なる疑團として放抛すべきか (『増補死生観』 p. 1)

◇加藤が好んだ死生観

「三界を了達するに心によつてあり、十二因縁復た然り、生死皆な心に由りて作す所、心若し滅すれば生死盡く(華嚴經)といひ、宇宙の実相を真如と生滅の二門に分ち、前者を以て不生不滅の本体とし其本体の上に生滅の波瀾を起すものを宇宙の現象とし、波を離れて水なく、水を離れて波なきが如く、生滅を以て本体海上の波なりとし、優に近世哲学の精華たる現象即實在論に入る」(p. 91)

◇近代科学や唯物論思想の影響

「故に軀殻は本体で有る、精神は之れが働き即ち作用で有る、軀殻が死すれば精魂は即時に滅ぶるので有る、夫れは人類の爲めに如何にも情け無き説では無いか、情け無くとも真理ならば仕方が無いでは無いか、哲学の旨趣は方便的では無い、慰論的では無い、縦令殺風景でも、剥出しでも、自己心中の推理力の厭足せぬ事は言はれぬでは無いか。」

(中江兆民『統一年有半』1901年
第一章「総論」(一)「靈魂」)

◎藤村操 (1886-1903) の哲学的自殺 (1903)

(平岩昭三『検証 藤村操——華嚴の滝投身自殺事件』不二出版、2003年)

☆藤村操。父藤村胖、旧南部藩士、藤村政徳の長子。大蔵省主計官を退任後、屯田銀行頭取。1899年死亡。

☆札幌中学。府立開成中学。京北中学(井上円了設立、哲学的雰囲気)。

☆1902年一高入学。1903年5月22日、自殺。

◎魚住折蘆(影雄)(1883-1910)。京北中学以来の藤村の友だちで弔辞を読んだ。「自殺論」第一高等学校『校友会雑誌』1903年5月。

☆投身自殺の第一報は万朝報、5月26日付。叔父、那賀通世の哀悼文。

「嗚呼哀かな、痛しいかな。余が兄の子藤村操、幼にして大志あり、哲学を講究して、宇宙の真理を發明し、衆生の迷夢を醒まさんと欲し、昨年より第一高等学校に入り、哲学の予備の学を修め居たれども、学校の科目は、力を用ふるほどの事に非ずとて、専ら哲学宗教文学美術等の書を研究して居たりしが、去る二十日の夜、二弟一妹と唱歌を謡ひ、相撲を取り、一家愉快に遊び楽しみ、翌廿一日の朝、学校に行くとして出でたるまゝ、廿二日になりても帰らず、母大いに憂ひて、机の引出しを明けて見たるに、杉の小箱の蓋に「この蓋あけよ」と大書しあり。……」



● 巖頭之感

悠々たる哉天壤、遼々たる哉古今、五尺の小軀を以て此大をはからむとす。ホレーショの哲學竟に何等のオーソリティーを價するものぞ。萬有の眞相は唯一言にして悉す、曰く、「不可解」。我この恨を懷いて煩悶、終に死を決す。既に巖頭に立つに及んで、胸中何等の不安あるなし。始めて知る、大なる悲觀は大なる樂觀に一致するを。

II. 戦中から戦後へ

◇第2の死生観流行（第二次世界大戦中）

◎死を覚悟する多くの若者

◇第3の死生観流行（1980年代以降）

A. 必須のニーズや困難な争点

- * 死にゆく人の自覚とケアのニーズから。
- * 生命倫理問題
- * 慰霊や追悼の問題

B. 死生の文化の回復

- * 死生の文化の欠落
- * 葬祭の文化の見直し

◇戦中の死生観の鼓吹

◎死に急ぐことを促す死生観の文章

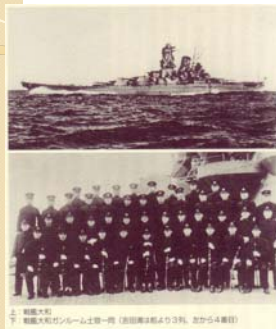
西田長男編『日本精神と死生観』
(有精堂刊、1943年)



紀平正美「死滅を考へざりし日本人」
佐藤通次「国家と生死」
鈴木大拙「日本人間における生死観の発展」
西田長男「志士の生死観」

- 紀平正美「死滅を考へざりし日本人」
- 「今日の大戦争に於て、第一線に活躍して居る日本人[が]、天皇に、国家に、其の生を拓して居ること、何れにおろかあるべしとは考へられないが、知識者には、死の意義を考へるなど、多少の迂路がとられるやうである。然るに少年航空兵として訓練を受けたものには、幾多の美談佳話があるが、どうせ死ぬるならば、其の「只今」を永恒ならしめんとして、更に大敵或は敵の巨漢に体當りの自爆をやるなどは、生死超越などいふ概念で取り扱はるべき性質のものではない、死を永恒ならしむるといふ、神代時代からの日本の考へ方をそのままに今に露呈したものに外ならない。則ち死滅を考へないのである。」 (pp. 26-7)

III. 吉田満と生き残りの悲しみ



◇戦中派の戦後

◎吉田満『戦艦大和の最期』（1946-52年）

- ☆学徒出陣の生き残り将校、吉田満（1923-79）。
- ☆辛くしてわが生き得しは彼等より狡猾なりし故にあらじか（岡野弘彦）

◎米軍の沖縄上陸作戦は、3月25日から。

☆天一号作戦発動、3月26日。

- ◎当初の目的は敵機動部隊を九州に誘い出すため佐世保に向かう予定だったが、すでに敵は九州近海に接近。
- ◎直接、沖縄に向かい座礁。上陸を邪魔して、兵士は陸上戦に。
- ◎数千人の特攻作戦。



「大和」の艦隊司令部の航路図
 左舷側（艦首） 右舷側（艦尾）
 排水量（満載） 72,000トン 全長 263メートル
 全高 200メートル 最大速力 27ノット
 航続距離 7,000海里

◎戦闘の経過

- ☆4月7日、徳之島沖西北沖で8回にわたり、のべ1000機に近い米軍機の攻撃を受け、沈没。
- ☆乗組員3332名のうち、生き残った者276名。護衛艦5隻も沈没、総勢、3721人が死亡。

- ◎海軍内にはこの「愚劣な作戦」への反対論が多かった。
- ☆第二艦隊の司令長官（提督）伊藤整一中将も反対だった。

◎大和艦上での論戦。学徒将校VS海軍兵学校将校。

「世界海戦史上、空前絶後の特攻作戦ならん／（中略）果たしてその成否如何 士官の間に、激しき論戦続く／必敗論圧倒的に強し／（中略）豊後水道にていちやく潜水艦に傷つかん、あるいは途半はにして航空魚雷に斃れん（中略）／痛烈なる必敗論議をかたわらに、哨戒長白洲大尉（一次室長）、薄暮の洋上に眼鏡を向けしまま低く囁くごとく言う／「進歩のない者は決して勝たない、負けて目覚めることが最上の道だ、（中略）それ以外にどうして日本が救われるか 今日覚めずしていつ救われるか 俺たちはその先導になるのだ／日本の新生にさきがけて散る まさに本望じゃないか」

◎「君国のために散る それは分る だが一体それは、どういうことにつながっているのだ 俺の死、俺の生命、また日本全体の敗北、それを更に一般的な、普遍的な、何か価値というようなものに結び付けたいのだこれらいつさいのことは、一体何のためにあるのだ」

「それは理屈だ 無用な、むしろ有害な屁理屈だ 貴様は特攻隊の菊水のマークを胸に付けて、天皇陛下万歳と死ねて、それで嬉しくないのか」

「それだけじゃ嫌だ もっと、何かが必要なのだ」

ついには鉄拳の雨、乱闘の修羅場となる「よし、そういう腐った性根を叩きなおしてやる」白洲大尉の右の結論は、出撃の数日前、よくこの論戦を制して、収拾に成功せるものあり

◎伊藤整一艦長は死の深淵を見ていた。

「食後／艦長ヲ中心ニ、和気藹々、歓談サカンナリ／艦長「電測士、貴様ハ一人息子ダツタナ」／「サウデアリマス」／「本当ニ後顧ノ憂ヒナシカ」（出港数日前、我等ニ対シ家庭状況ヲ答申セシメラレタリ）／「本当ニアリマセン」／「本当ニナイカ」／答フル能ハズ、タダ炯々ノ眼光、一閃悲愁ヲ湛ヘタルヲ直視セリ」

*佐世保港で入院——「白衣ノ身、波近キ病棟、春ノ夜ニヒソカニ思フ／我ガ数日ノ体験、ソノ特攻出撃ト呼ブヤ／コノ乏シキ感懐ヲ、死線ヲ超エタリ、ト云フヤ／然ラズ 我等萬一ノ生ヲモ期セズ／自ラ死ヲ撰ビシニ非ズシテ死、我レヲ捉ヘタルナリ／精神ノ死ニ非ズシテ肉体ノ死ナリ／人間ノ死ニ非ズシテ動物ノ死ナリ／カカル安易ナル死ナシ／我レ一瞬トテ死ニ直面シタルカ／出港以来、自ラヲ凝視セシコトアリヤ／ソノ間、一刻ノ生甲斐ヲモ感ジ得タルヤ／我レヲ救ヒシモノ戦闘ノ異常感ナリ マタ去リ行ク者ノ悲憤ナリ／定マレル祖国ノ悲運ナリ／数無キ報イラザル戦災ノ死ヲ思フベシ（後略）」

◎大和沈没後の吉田満の歩み

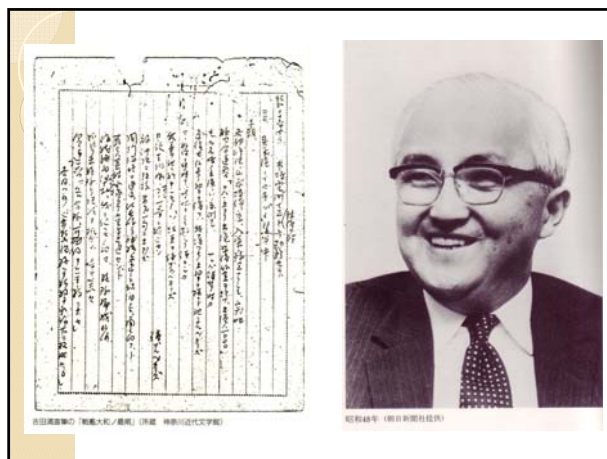
☆頭部の挫傷のため入院。完治しないうちに自ら希望して退院し、特攻を志願。高知県須崎の人間魚雷基地に赴任。だが、特攻を命じられず、対艦船用電探設営隊長。

☆すぐに復員せず、久通村に残り、小学校の分教場の教師の代務。半月後、上司から呼び出され、叱責され、女子青年団全員の歌に送られて久通村を去る。

☆恵比寿の家が焼けて、西多摩郡吉野村（青梅市）に疎開していた両親の住む家に帰らず富山県に。

☆9月中旬、吉野村に帰還。同じ村に疎開していた吉川英治に会う。「氏は端座してみじろぎもせず、相鍵も打たず耳を傾けていた。やがて私を見つめる眸の中に、涙が湧いてきた」「君はその体験を必ず書き記さなければならない」「それはまず自分自身に対する義務であり、また同胞に対する義務でもある」

（「占領下の『大和』」「戦艦大和」角川文庫）

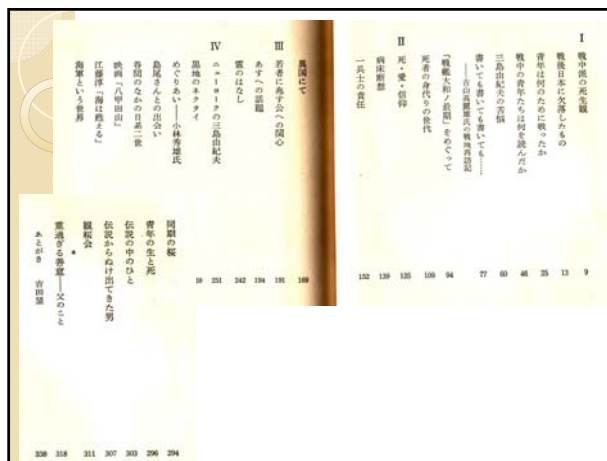
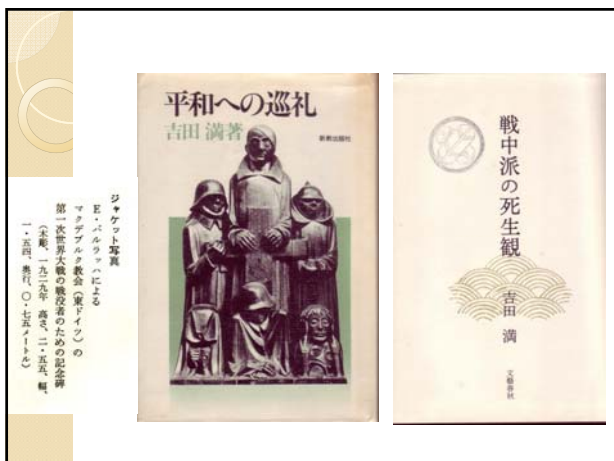
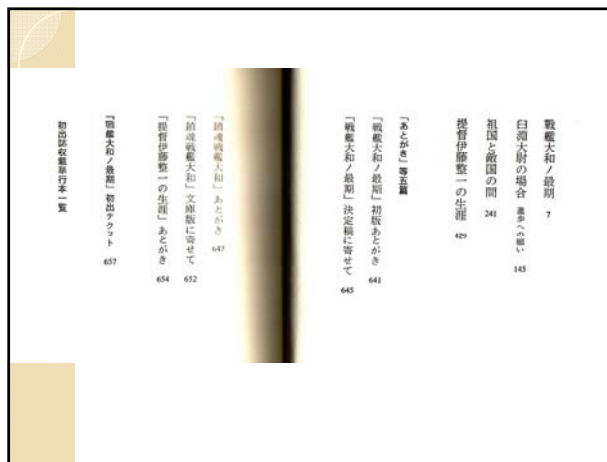


◎吉田満「死・愛・信仰」

（『戦中派の死生観』文藝春秋、1980年）

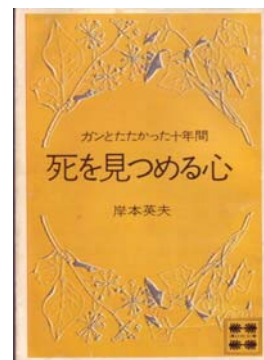
「お前の生涯を飾る一切のうち、いま死にゆくお前に役立つものがあるか。……何もない、何一つない、これが俺だったのだ。」

「欺かれてはならない。あのようなものが死ではない。死から充分にへだたり、生きることが平凡な確かさを持っているとき、そこにこそ死がある。死ぬか生きるかの刹那、あるのはただ肉体の、感覚の、動物の死のみだ、生きねばならぬ。正しく、愛をきずいて、生きるにふさわしく生きねばならぬ。」



IV. がんで死にゆく者の悲しみ

- 岸本英夫 (1903-64)
『死を見つける心——ガンとたたかった十年間』(講談社、一九六四年、文庫版、九七三年)
1954年発病
- 高見順 (1907-65)
『詩集 死の淵より』(講談社、一九六四年、文庫版、一九七一年)
1963年発病



- 生死観を語る場合には、二つの立場がある。第一の場合は生死観を語るにあたって、自分自身にとっての問題はしばらく別として、人間一般の死の問題について考えようとする立場である。これは、いわば、一般的かつ観念的な生死観である。もちろん、自分も人間であるから、自分というものも、広い意味では、その中にはいっている。このような生死観も有用である。自分も含めた意味での人間の生死観の考え方を整理しておくことは、いざという場合の基礎的な知識となるからである。
- しかし、もっと切実な緊迫したもう一つの立場がある。それは、自分自身の心が、生命飢餓状態におかれている場合の生死観である。

腹の底から突きあげてくるような生命に対する執着や、心臓をまで凍らせてしまうかと思われる死の脅威におびやかされて、いてもたってもいられない状態におかれた場合の生死観である。ギリギリの死の岩頭にたつて、必死でつかもうとする自分の生死観である。P11-12

生命飢餓状態におかれた人間が、ワナワナしそうな膝がしらを抑えて、一生懸命に頑張りながら、観念的な生死観に求めるものは何であるか。何か、この直接的なはげしい死の脅威の攻勢に対して、抵抗するための力になるようなものがありはしないかということである。それに役立たないような考え方や観念の組み立ては、すべて、無用の長物である。p13

死というのは、人間にとって、大きな、全体的な「別れ」なのではないか。そう考えたときに、私は、はじめて、死に対する考えかたが、わかったような気がした。P30

「大きな、全体的な」別れというところに注目したい。「別れ」を生きることは、自らの生の全体と大きな世界(宇宙)そのもの実在性とを肯定することと考えられているようだ。

それまで、死と無といっしょに考えていた時には、自分が死んで意識がなくなれば、この世界もなくなってしまうような錯覚から、どうしても脱することが、できなかった。しかし、死とは、この世に別れをつけるときと考える場合には、もちろん、この世は存在する。すでに別れをつけた自分が、宇宙の霊にかえって、永遠の休息に入るだけである。P33

高見順『死の淵より』1964年

帰る旅

この旅は
自然へ帰る旅である
帰るところのある旅だから
楽しくなくてはならないのだ……
大地へ帰る死を悲しんではいけない
肉体とともに精神も
わが家へ帰れるのである
ともすれば悲しみがちだった精神も
おだやかに地下で眠れるのである
ときにセミの幼虫に眠りを破られても
地上のそのはかない生命を思えば許せるのである

古人は人生をうたかたのごとしと言った
 川を行く舟がえがくみなわを
 人生と見た昔の歌人もいた
 はかなさを彼らは悲しみながら
 口に出して言う以上同時にそれを楽しんだに違
 いない
 私もこういう詩を書いて
 はかない旅を楽しみ
 たいのである



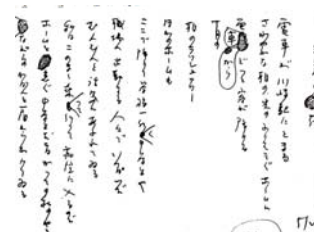
昭和25年8月、鎌倉・柳田病院。



青春の健在

ホームに行く眠そうな青年たちよ
 君らはかつての私だ
 私の青春そのままの若者たちよ
 私の青春がいまホームにあふれているのだ
 私は君らに手をさしのべて握手したくなった
 なつかしささけではない
 遅刻すまいとブリッジを駆けのぼって行く
 若い労働者たちよ
 さようなら

君たちともう二度と会えないだろう
 私は病院へガンの手術を受けに行くのだ
 こうした朝、君たちに会えたことはうれしい
 見知らぬ君たちだが
 君たちが元気なのがとてもうれしい
 青春はいつも健在なのだ
 さようなら
 もう発車だ
 死へともう出発だ
 さようなら
 青春よ



電車の窓の外は
 光にみち／喜びにみち
 いきいきといきづいている
 この世ともうお別れかとおもうと
 見なれた景色が／急に新鮮に見えてきた
 この世が／人間も自然も
 幸福にみちみちている
 なのに私は死なねばならぬ
 なのにこの世は実にしあわせそうだ
 それが私の悲しみを慰めてくれる
 私の胸に感動があふれ
 胸がつまって涙がでそうになる
 (「電車の窓の外は」)



装画：野坂徹夫、装幀：菊地信義、2012年2月刊